

んな気がしてなりません。作者の我鬼といふ人は新進の小説家、専ら皮肉を以つて鳴つた覇氣満々の人のやうに聞いてをります。前田さんの文を読んだら、我鬼先生、定めし、ニヤリと皮肉な微笑を惜まないと思ひます。「歩けく繩紙屑も我も月」、つまらない議論に停滞してゐたり、僅か一句の廻りをぐるぐる廻つてゐたりしては遅れてしまひます。どんく歩くに限ると思ひます。(中略)

趣味欄が折角の欄ながら、どうもあまり振はないのは遺憾に存じます。此頃のやうに、私は何が好きだ、私はかういふものを大切に持つてをる、といふやうな記述では更に趣味欄ではないやうに思ひます。(中略)これと、季題寸言も、聊か真髓からはなれて、絳景文の一片になりか、つて来たやうな気がいたします。これも残念に思ひます。(中略)季題寸言はむしろ俳句を作る以上にむづかしいものですから、やたらにやられてはたまりません。一寸してすぐ出来るものと思はれても大事です。文章としての季題寸言の味ひは、茶べりの四畳半裡、錦手ならざる茶碗の底に油のごとくしたみ落す数滴の茶の味と等しいものと思ひます。食後の番茶のやうにさうがぶがぶと飲めるものでもなし、亦飲むものでもないと思ひます。

(下略)

(十一月六日)

## 賀宴の卓

(曲水718)

夕立のあとの夜は八時、源氏香なりの食卓にスープがなかば済んだ頃——話し初めるに、時分——麦酒のほてりに輝いて、楽しい歓語が渡りそめた。近頃珍らしい顔合せなので、随分いろんな方が寄つたけれども、みんな軽いがくしい心地に溶けあつて、皿をついたり、洋蓋をあげたり、食卓の草花越しに笑つたり、時々主賓の辺りに眼をやつたり、同じ心に寛ろいでしまつた。

合間くは卓僮がつないで、皿が手早く代つていった。外は不忍の池の空に、火花が揚つたり、火が流れたり、何時までも夜は浅かつた。就中、主賓の辺りには、和やかな笑ひを鳴雪翁の声が縫つて、灯影は何時も宵だつた。

デザートの皿が並ぶ頃、卓の端から白水郎氏が起つた。そして何日もの歯ぎれのい、口調で、「忽卒の間に運んだ会で、当事者の不慣れ、手落ちも尠くなく、粗末の宴にも関らず……」と、会の由来と臨席者への謝辞を叙べ、「然し」と続け、「拝見いたします処、今夜の宴は現俳壇の絵巻物そのもの」と、巧みに結んで、発起者の挨拶を叙べた。

榮堂氏が續いて立つた。明快な軽い揶揄を交ちへて発起者の一人としての辞を述べ、句帖を讀し、「第三者として見るところ、近頃俳壇には、つまらぬいさかひや、揚足取りが間々あるが、そんな事は、一切止して、打寛ろいで進みたい」云々と席に復した。

「自分は既に俳壇の者ではないが」と、弧軒氏が起つ。「いまこの水巴句帖を見ると、今更ながら水巴氏が、二十年来俳句に精進された不斷の努力を思ひ、羨ましくさへ考へる」

鳴雪翁が背高く起つた。

「私が先づ失礼するから、どうぞ御自由に」と、洋蓋の酒をごくりと干して、今宵の宴の発起者の労をねぎらひ、「さて、かく祝賀の宴に當つて思ふに、水巴君は生来我儘のきく家庭に育つたために、非常に我儘者であり、疍癩持であり、きかぬ氣の男であり……」と、古き頃よりの思出に耽る心に、「それが為か、長らく君と仕事を共にした者でも、或ひは別れ去つた者がなくてもなかつた。しかし、猶且つ、何時も、君の廻りには君の仕事を共に分ち助くる者が尠くなく、従つて君の仕事は着々とその進む処に向つて進みつ、あ